哀辭考

後藤秋正

一

哀辭は死者を追悼するために制作された韻文の一體である。しかしこれについて從來まとまった形では考究されたことがない。[1] そこで本稿においては、哀辭の成立について考察し、後漢から魏晉にかけて制作された哀辭、特に曹植と潘岳の哀辭を中心として分析を加え、その推移の様相をたどりたいと考える。

そもそも哀辭とはどのようなものであると認識されていたのであろうか。『文心雕龍』[2] 哀弔篇は、まず哀辭の名義について、

賦憲之謚、短折曰哀。哀者、依也。悲實依心、故曰哀也。以辭遣哀、蓋下流之悼、故不在黃髮、必施夭昏。

賦憲の謚に、短折を哀と曰う。哀とは、依なり。悲しみの實は心に依る、故に哀と曰うなり。辭を以て哀しみを遣るは、蓋し下流の悼にして、故より黃髮に在らず、必ず夭昏に施す。

と述べている。哀辭は心にまといつく悲しみをささげるためのものであり、しかも目下の者に對する追悼であるから、長壽を全うした者ではなく、年少の死者のみを對象として書かれるというのである。劉勰は哀辭が夭折した者を對象とする點を強調して、贊においても、

辭之所哀、在彼弱弄。苗而不秀、自古斯慟。

辭の哀しむ所は、彼の弱弄に在り。苗にして秀でざるは、古え自り斯れ慟す。

と重ねて言っている。また哀辭の基本的な内容については、

原夫哀辭大體、情主於痛傷、而辭窮乎愛惜。幼未成德、故譽止於察惠、弱不勝務、故悼加膚色。

夫の哀辭の大體を原ぬるに、情は痛傷を主として、辭は愛惜を窮む。幼きは未だ德を成さず、故に譽れは察惠に止まり、弱きは務めに勝えず、故に悼みは膚色に加う。

と言い、悲痛な心情と愛惜の念を中心とするものであり、また對象は夭折した者であるから、誇張の過ぎた表現に陥ることのないように戒めている。以上が『文心雕龍』哀弔篇に見られる哀辭の名義と内容についての發言であるが、これらのうち一定部分は、摯虞（？～三一一）の『文章流別論』（『太平御覽』巻五九六）の發言を踏まえていると考えられる。

哀辭者、誄之流也。……率以施于童殤夭折、不以壽終者。……哀辭之體、以哀痛爲主、緣以歎息之辭。

哀辭は、誄の流れなり。……率ね以て童殤・夭折に施し、壽にして終えし者を以てせず。……哀辭の體は、哀痛を以て主と爲し、緣るに歎息の辭を以てす。

摯虞の敍述は簡潔ではあるが、哀辭が「誄の流れ」であることを明示するほか、對象が夭折した者に限定されること及び內容の把握に關して、劉勰の認識はこれとほとんど一致していると言えるであろう。また近接したジャンルである誄について、『文心雕龍』誄碑篇が、

誄者、累也。累其德行、旌之不朽也。

誄は、累なり。其の德行を累ねて、之を不朽に旌わすなり。

と言うように、誄は死者の生前の德行を記す、從って成人を對象者とする點で哀辭とは異なると考えられていたことも、あわせて確認しておきたい。

それでは現存する哀辭は、どのようなものとしてわれわれの前に提示されているのであろうか。また、その源流はいかなるものと考えられたのであろうか。

二

まず源流について見てみよう。さきの『文心雕龍』においては、哀辭の源流を『詩經』秦風、黃鳥篇にまで溯らせて、

昔三良殉秦、百夫莫贖、事均夭枉、黃鳥賦哀、抑亦詩人之哀辭。

昔、三良は秦に殉じて、百夫も贖う莫し、事は夭枉に均しく、黃鳥は哀しみを賦す、抑も亦た詩人の哀辭なるか。

と言う。「黃鳥」は、小序によれば、秦の穆公が死に際して、後に三良と稱される子車氏の三子に殉死を命じたことを刺る作品であるとされる。確かに「黃鳥」には三良の死を悼む感情がこめられているが、やはり「詩人の哀辭」、『詩經』の詩の中での哀辭的なものとしておくだけにとどめるべきであろう。

ついで『文心雕龍』は、

暨漢武封禪、而霍嬗暴亡、帝傷而作詩、亦哀辭之類矣。

漢武の封禪するに暨んで、霍嬗暴かに亡す、帝傷みて詩を作るは、亦た哀辭の類なり。

と述べ、前漢の武帝が封禪を行なったとき、霍去病の子霍嬗（字は子侯）が急死したのを傷んで作った詩も「哀辭の類」としている。武帝が泰山で封禪の儀式をとり行なったのは、元封元年（前一一〇）四月のことである。『史記』孝武本紀はこのときのことを、

禮畢、天子獨與侍中奉車子侯上泰山、亦有封。……奉車子侯暴病、一日死。

禮畢り、天子獨り侍中奉車子侯と泰山に上り、亦た封有り。……奉車子侯暴かに病あり、一日にして死す。

と記しており、『漢書』卷五十五霍去病傳にも、同樣の記事がある。このときに武帝が作ったとされる詩は、『文心雕龍』の諸注はともに現存しないとしているが、『雲笈七籤』卷一百十に引く『洞仙傳』の車子侯の條には、次の話が引かれている。

車子侯者、扶風人也。漢武帝愛其清淨、稍遷其位至侍中。一朝語家云、我今補仙官、此春應去、至夏中當暫還、還少時復去、如其言。武帝思之、乃作歌曰、

車子侯は、扶風の人なり。漢の武帝、其の清淨なるを愛し、稍くして其の位を遷して侍中に至らしむ。一朝家に語りて云う、我、今仙官に補せらる、此の春應に去り、夏中に至りて當に暫く還るべきも、還た少時にして復た去らんと、其の言の如し。武帝之を

思い、乃ち歌を作りて曰く、

嘉幽蘭兮延秀　幽蘭の延秀を嘉するに
覃妖娙兮中溏　覃は中溏に妖娙たり
華裴裴兮麗景　華は裴裴として景に麗き
風俳佪兮流芳　風は俳佪して芳を流す
皇天兮無慧　皇天慧る無く
至人逝兮仙鄉　至人　仙鄉に逝けり
天路遠兮無期　天路は遠くして期する無く
不覺涕下兮霑裳　覺えず涕下りて裳を霑す

この記載にある武帝の「歌」が、『文心雕龍』でいう武帝の「詩」であると斷定してよいかどうか、なお檢討を要するであろう。ただ、霍嬗が死んだ年齡は不明だが、父去病が元狩二年（前一一七）に二十四歳で死んだときに後を嗣いだことからすれば、彼が年少であったことは確實である。したがって夭折した者を對象とする原則にはのっとっている。哀辭の原初的形態は、あるいはこのような歌謠であったかもしれない。

哀辭の歷史的變遷についての『文心雕龍』の記述が詳細で分析的になるのは、後漢期の作品になってからである。

降及後漢汝陽王亡、崔瑗哀辭、始變前式。……又卒章五言、頗似歌謠、亦彷彿乎漢武也。至於蘇順張升、竝述哀文、雖發其情華、未極心實。

降って後漢の汝陽王の亡するに及び、崔瑗の哀辭は、始めて前式を變ず。……又卒章の五言は、頗る歌謠に似、亦た漢武を彷彿するなり。蘇順・張升に至っては、竝びに哀文を述べ、其の情華を發すと雖も、未だ心の實を極めず。

ここにおいては、まず崔瑗（七七～一四二）がとり上げられ、彼の哀辭が武帝の歌謠風を殘しながらも舊來の形式を變革したとされるが、その哀辭は現存しない。次の蘇順（七〇?～一三〇?）については、『後漢書』卷八十蘇順傳に哀辭のあったことが明記されているが、この哀辭も現存しない。ただ、『文心雕龍』誄碑篇に、

潘岳構意、專師孝山、巧於序悲、易入新切、所以隔代相望、能徽厥聲者也。

潘岳の構意は、專ら孝山を師とす、悲しみを序するに巧みにして、新切に入り易し、代を隔てて相い望み、能く厥の聲を徽かせし所以なり。

とあり、蘇順（字は孝山）の誄がその構想の點で、潘岳の師とされたことが指摘されている。哀辭についても何ほどかの影響があったに違いない。張升（一二一～一六九）にいたっては、嚴可均『全後漢文』は一篇の作品も收錄していない。また『北堂書鈔』卷一百二哀辭三十七に引かれる『文章流別論』は、哀辭の作者として、崔瑗と蘇順のほかに馬融（七九～一六六）と張叔を擧げているが、馬融には誄すらも現存せず、張叔についてはその事蹟も全く不明である。

これらとは別に、『太平御覽』卷五百九十六哀辭の條には、「班固馬仲都哀辭曰」として、次の文章を引いている。

車騎將軍順文侯馬仲都、明帝舅也。從車駕於洛水、浮橋馬驚、入水溺死。帝謂侍御史班固、爲馬上三十步哀辭。

車騎將軍・順文侯・馬仲都は、明帝の舅なり。車駕に洛水に從い、浮橋に馬驚き、水に入りて溺死す。帝、侍御史班固に謂う、馬上三十步の哀辭を爲せと。

この文章は、『全後漢文』卷二十五にも『太平御覽』を出處として

收められており、哀辭の序文に相當するものであろうか。しかし、『後漢書』には「順文侯」という爵位は見えず、馬仲都なる人物についても手がかりがない。この一文の根據とするところは確認できないのである。ところが、時代はくだるが、秦漢以來の詩文の諸體について起源を說く、梁の任昉撰と稱する『文章緣起』(明・陳懋仁註)は、「哀詞、漢班固梁氏哀詞。」とするし、明の徐師曾の『文體明辯』も、班固(三三～九二)に關して次の記事を載せている。

昔漢班固初作梁氏哀辭、後人因之、代有撰著。

昔、漢の班固初めて梁氏哀辭を作り、後人之に因りて、代々撰著有り。

梁氏が、章帝の子和帝を生み、のちに恭懷梁皇后と諡された梁貴人(六二～?)を指すとすれば、班固にこのような作品のあった可能性はある。『文體明辯』の基くところも不明であって資料的には確證に乏しいが、崔瑗以外に班固を哀辭の祖とする認識が、一方には存在したことをこれらは示しているといえよう。[5]

そのほか管見の及ぶ限りにおいて、哀辭を制作したことが知られる人物を擧げておこう。まず班固の妹班昭(四九?～一二〇?)と楊脩(一七五～二一九)について、『後漢書』のそれぞれの本傳に哀辭の作のあることが記される。だが、これらの哀辭はいずれも現存せず。[6] さきにも引いた『文章流別論』(『太平御覽』卷五九六)に、

建安中、文帝臨菑侯各失稚子、命徐幹劉楨等、爲之哀辭。

建安中、文帝・臨菑侯各おの稚子を失い、徐幹・劉楨等に命じて、之が哀辭を爲らしむ。

とされている徐幹(一七〇～二一七)については、『文心雕龍』にも、「建安哀辭、惟偉長差善、行女一篇、時有惻怛。」(建安の哀辭は、惟だ偉長のみ差や善し、行女の一篇は、時に惻怛有り。)と、作品名が示されているが、これも現存しない。劉楨(?～二一七)についても同樣である。それでは建安年間以前の哀辭は、全く見られないのであろうか。

日比野丈夫「墓誌[7]の起源について」には、『文物』(一九七四年八期)にその出土が報じられた「許阿瞿墓誌」(『文物』等に「墓誌」とあるのに從うが、後述するように「哀辭」とすべきであろう)が紹介されている。關連部分を引用しよう。

一九七三年に河南省の南陽市東郊の墓中から發見された畫像石の一部に刻されたものがある。石は高さ四〇センチ、幅一一センチ、文はその向って左端に刻され、隷書で六行、每行二三字からなる。建寧三年(一七〇)わずか五歲で死んだ許阿瞿という幼兒のためのもので、右側の上段に刻された敷物の上に座っている人物が許阿瞿の像であるとされる。……この文字の部分だけをとりあげれば、形式、內容ともにのちの墓誌とほとんど變りがないといってよい。

この畫像石を最初に報告した前記『文物』所載の南陽市博物館編「南陽發現東漢許阿瞿墓誌畫像石」によれば、日比野氏の記述はやや不正確であって、實際は畫像石は高さ七十センチ、幅百十二センチであり、許阿瞿の座像は上段左側にあり、しかも像の右上にはっきりと「許阿瞿」の三字が刻されてある。また文章は左端から十七センチほどのところから記され、文末に近いほど損傷が激しくなっている。この畫像石の寫眞は『文物』のほか、『南陽漢代畫像石刻』(南陽市博物館、閃修山等編、上海人民美術出版社、一九八一)及び『南陽漢代畫像石』

（同編集委員會編、文物出版社、一九八五）などに收錄されたが、前者が鮮明である。なお私が、一九八七年八月、この畫像石を展示する南陽漢畫館において、研究員の李陳廣氏から說明を受けたところ、畫像石の材質は石灰岩であり、『文物』所載の釋文は拓本を郭沫若氏に送って解讀を依頼したこと、當初不明だった第二十四字は集團討議によって「身」字と認定したことなどの事實が判明した。ただし、この「身」字は上端に一字分はみ出したところに刻されている。この內容に注目したい。[8]

惟漢建寧、號政三年。三月戊午、甲寅中旬。痛哉可哀、許阿瞿身。年甫五歲、去離世榮。遂就長夜、不見日星。神靈獨處、下歸窈冥。永與家絕、豈復望頁（額）。謁見先祖、念子營營。二（三）增仗人（火）、皆往弔親。瞿不識之、啼泣東西。久乃隨逐、當時復□（遷）。父之與母、感□□□。□□（王）五月、不□□（晩）甘。羸劣瘦□、投財連篇。冀子長哉、□□□□。□□□此、□□土塵。立起□□（墝）、以快往人。

次に缺字のない句を書き下す。

惟れ漢の建寧、號政の三年。三月戊午、甲寅の中旬。痛ましきかな哀しむ可し、許阿瞿の身。年甫めて五歲、世榮を去離す。遂に長夜に就きて、日星を見ず。神靈獨處して、下りて窈冥に歸す。永く家と絕たれば、豈に復た額を望まん。先祖に謁見し、子を念いて營營たり。二增の仗人、皆な往きて弔親す。瞿之を知らず、東西に啼泣す。久しくして乃ち隨い逐い、……。父と母と、……。……、……。……、財を投ずること連篇たり。冀わくは子の長からんことを、……。……、……。……、以て往人を快くせん。

この文章は後漢の靈帝の建寧三年三月十八日に死んだ許阿瞿のために、同月二十二日に書かれたものである。のちの哀辭と違って生前の許阿瞿の描寫は見られないが、殘された者の悲哀は傳わる。文中に生前の描寫がないのは、畫像石に彼の姿があるのと關連しよう。最後の句も、許阿瞿の周圍に刻された舞樂や百戲によって死後の魂を慰めようとすることを言うからである。徐自强「墓誌淺論」[9]によれば、一九八七年三月に河南省唐河縣で發掘された鬱平大尹馮君孺人畫像石墓の主室の柱には、「鬱平大尹馮君孺人、始建國天凰五年（一八）十月十柒日癸巳葬、千歲不發」の二十七字が刻され、一九五三年に陝西省綏德縣で發掘された王德元墓では、墓室の後壁に「永元十二年（一〇〇）四月八日王德元室宅」と刻されており、他に「永元十五年」、「永初五年（一一一）」などの年號が刻された墓もあるという。これらから見ると、墓室內部に文章を刻むことは、ほぼ後漢初期に始まったと思われる。先述した「許阿瞿墓誌」は韻文であり、しかも五歲の幼兒を對象としているところから見て、單なる墓誌とするよりも、これこそ『文章流別論』の提示する「童殤・夭折に施し」た早期の哀辭と考えてよいであろう。つまり考古學の成果に照らしても、後漢の建寧三年ころまでには、四言體の哀辭が成立していたと認められるわけである。

この「許阿瞿墓誌」以後、建安年間以前のもので、ここに一言觸れておくべきものに、『魏志』卷八陶謙傳の裴注に引かれる『吳書』で、「謙死時、年六十三、張昭等爲之哀辭曰」といって載せられる四言三十三句の「辭」[10]がある。この作品は、孫星衍撰『續古文苑』に張昭（一五六～二三六）の「溧陽侯陶謙哀詞」として收められ、『全三國文』卷六十五にも「徐州刺史陶謙哀辭」として收められている。しかし『景定建康志』卷四十三においては「張昭哀之、其詞曰」として引かれていて、「哀辭」とは題されていない。內容的にも張昭個人の深い

感慨はうかがえず、そもそも興平元年（一九四）に六十三歳で死んだ者を對象とするこの作品は、死者の生前の功績を累述していることから哀辭と稱するには疑問が多い。また『義門讀書記』卷二十六の魏志陶謙傳の項で何焯が、「按、子布（張昭の字）之筆未爲奇傑。」と述べているのも首肯できるようである。[11]

以上、『文心雕龍』等の哀辭源流論に添って檢討した結果、指摘される哀辭はほとんど現存せず、許阿瞿に獻じられたものを除いて、その實體把握には、なお隔靴搔痒の感を禁じ得ない。われわれにとって、『文章流別論』や『文心雕龍』で提示されるような哀辭に接し得るのは、實に後漢最末期の曹植に至ってからである。

三

建安文學を代表する曹植（一九二～二三二）には、三篇の哀辭とその佚文が殘されている。以下、彼の哀辭について分析を加える。[12]

まず「金瓠哀辭」（『藝文類聚』卷三四）と序を引こう。

金瓠、予之首女、雖未能言、固以授色知心矣。生十九旬而夭折、乃作此辭。辭曰、

在襁褓而撫育、尚孩笑而未言。不終年而夭絶、何負罰於皇天。信吾罪之所招、悲弱子之無譽。去父母之懷抱、滅微骸於糞土。天地長久、人生幾時。先後無覺、從爾有期。

金瓠は、予の首女なり、未だ言う能わずと雖も、固より以て色を授け心を知る。生まれて十九旬にして夭折し、乃ち此の辭を作る。辭に曰く、

襁褓に在りて撫育せられ、尚お孩笑するも未だ言わず。年を終えずして夭絶す、何ぞ皇天に罰せ負る。信に吾が罪の招く所にして、弱子の譽無きを悲しむ。父母の懷抱を去り、微骸を糞土に滅す。天地は長久なるに、人生は幾時ぞ。先後覺る無きも、爾に從うに期有らん。

この作品こそが資料に徵する限り、「童殤・夭折に施し」た、作者の判明する最も早い哀辭である。前半は六字句、後半は四字句で構成され、生後百九十日で死んだ長女を傷む父親の感情が直接的に傳わってくる。それは、わずかに「天地長久」の句が典據を『老子』に求められるだけであって、對句構成には意を用いているものの、全體としては平易な表現になっているからである。曹植は長女を失ってから二年のちに、「行女」も亡くしている。「行女哀辭」はその際の作品である。この哀辭には『曹集詮評』と『曹植集校注』に指摘があるとおり、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首」〈其一〉（『文選』卷三〇）の李善注に「陳思行女哀辭曰」として引かれる序文中の佚文、「家王征蜀漢」が存在している。『魏志』卷一武帝紀によれば、曹操が漢中の劉備を攻擊したのは建安二十三年（二一八）七月である。したがって「行女哀辭」の制作年次は、翌建安二十四年四月、さきの「金瓠哀辭」はその二年前、建安二十二年の作ということになる。ともあれ「行女哀辭」を見よう。

行女生于季秋、而終于首夏。三年之中、二子頻喪。
伊上靈之降命、何短修之難裁、或華髮以終年、或懷姙而逢災。感前哀之未闋、復新殃之重來。方朝華而晚敷、比晨露而先晞。感逝者之不追、情怨怨而失度。天蓋高而無階、懷此恨其誰訴。

行女は季秋に生まれ、首夏に終わる。三年の中、二子頻びに喪う。
伊れ上靈の命を降す、何ぞ短修の裁り難き、或いは華髮以て年を

終え、或いは懐姙して災いに逢う。前哀の未だ閟まざるに感ずるに、復た新殃の重ねて來る。朝華の晩に敷るが方く、晨露の先ず晞くが比し。逝く者の追われざるに感じ、情は忽忽として度を失う。天は蓋し高くして階無く、此の恨みを懐くも其れ誰にか訴えん。

「行女哀辭」も「金瓠哀辭」と同じく典據は少ない。「天蓋高」の句が、『詩經』小雅、正月篇の「謂天蓋高」を踏まえるのが目につく程度である。この哀辭が作られた建安二十四年は、二年前の十月に兄曹丕が太子と決定してから日ましに嚴しくなっていた曹植をとりまく狀況が、一段と悪化した年であった。なぜなら彼は八月に酒に醉って、關羽軍に包圍された曹仁を救援せよとの父曹操の命令を受けられないという失態を演じ、また秋には、曹植擁立に動いた側近の楊脩が誅殺されたからである。翌建安二十五年十月には曹丕が帝位について魏を建國、十一月に曹植は任地の臨菑に赴かされている。彼は政治の中樞に參畫する道を閉ざされていく中で、一歲に滿たない幼女をあいついで失ったのだ。かつては曹丕と太子の地位を爭っただけに、我が子の死は相當な深刻さで受けとめられたであろう。[13] 末句の「天蓋高而無階、懷此恨其誰訴」という表白は、そのような彼の焦燥感と孤獨感の所產と見ることも可能である。

だが彼の哀辭は、自身の心情を率直に吐露するものばかりではない。「仲雍哀辭」(『藝文類聚』卷三四)を見よう。

曹喈、字仲雍、魏太子之中子也。三月生而五月亡。昔后稷之在寒冰、鬭穀之在楚澤、咸依鳥憑虎、而無風塵之災。今之玄笫文茵、無寒冰之慘、羅幃綺帳、暖於翔禽之翼。幽房閑宇、密於雲夢之野、慈母良保、仁乎烏菟之情。卒不能延期於朞載、離六旬而夭沒。彼孤蘭之眇眇、亮成幹其畢榮。哀綿綿之弱子、早背世而潛形。且四孟之未周、將何願乎一齡。陰雲迴於素蓋、悲風動其扶輪。臨埏闥以歔欷、淚流射而霑巾。

曹喈、字は仲雍は、魏の太子の中子なり。三月に生まれて五月に亡す。昔、后稷の寒冰に在り、鬭穀の楚澤に在るや、咸な鳥に依り虎に憑り、而して風塵の災い無し。今の玄笫と文茵には、寒冰の慘無く、羅幃と綺帳は、翔禽の翼より暖かし。幽房と閑宇は、雲夢の野より密にして、慈母と良保は、烏菟の情より仁なり。卒に期を朞載に延ばす能わず、六旬を離て夭沒す。

彼の孤蘭の眇眇たる、亮に幹を成して其れ畢く榮く。綿綿たる弱子の、早に世に背きて形を潛むるを哀しむ。且つ四孟の未だ周らざるに、將た何ぞ一齡なるを願わん。陰雲は素蓋を迴り、悲風は其の扶輪を動かす。埏闥に臨みて以て歔欷し、淚は流射して巾を霑す。

曹喈は曹丕の次男である。しかし三箇月で早逝したためか、『魏志』等に名前は見えていない。ただ、曹丕が「魏太子」であったのは建安二十二年十月から建安二十五年正月までであるから、曹喈が死んだのは、「金瓠哀辭」と「行女哀辭」の制作時期とほぼ重なっている。その二篇の哀辭と「仲雍哀辭」との相違は、この哀辭が『詩經』『春秋左氏傳』『禮記』などを典據とする語句をちりばめ、野邊の送りから埋葬にまで言及する點にある。序においても對句を多用し、曹喈が愛情過多ともいえる恵まれた環境にあったことをくり返し述べることも考えれば、儀禮的色彩の濃い作品であることは明白である。我が子を亡くした失意のときに、臣下としての彼は、太子の次男に莊重な哀辭を獻じていたのである。

ここで曹植の誄にも目を向けておこう。彼には、「任城王誄」「大司馬曹休誄」「光祿大夫荀侯誄」「平原懿公主誄」「武帝誄」「文帝誄」「卞太后誄」「王仲宣誄」の八篇が殘されている。[14] このうち、「平原懿公主誄」については説明が必要であろう。なぜなら公主つまり明帝の娘曹淑は誄中に「生在十旬、察人識物」とあるように、太和六年（二三二）に死亡したとき四箇月に滿たず、哀辭を獻ずる對象であると考えられるからである。しかし『魏志』卷二十五楊阜傳に、「帝愛女淑、未期而夭、帝痛之甚、追封平原公主、立廟洛陽、葬於南陵。」とあるごとく、明帝は哀痛のあまり、異例にも成人の禮をもって遇したのである。諫言した臣下も多かった。陳羣の上疏（『魏志』卷二二陳羣傳）では、次のように言っている。

八歲下殤、禮所不備、況未期月、而以成人禮送之、加爲制服、擧朝素衣、朝夕哭臨、自古已來、未有此比。……況乃帝王萬國之主、靜則天下安、動則天下擾、行止動靜、豈可輕脫哉。

八歲は下殤にして、禮の備えざる所、況んや未だ期月ならずして、成人の禮を以て之を送り、加えて制服を爲し、朝を擧げて素衣し、朝夕に哭臨するをや、古え自り已來、未だ此の比有らず。……況んや乃ち帝王は萬國の主、靜かならば則ち天下は安く、動けば則ち天下は擾ぐ、行止動靜、豈に輕脫す可けんや。

すなわち、王族の一員である晩年の曹植が誄を獻じたのは、無益な摩擦を避け、明帝の破格な措置に追隨して公主を成人として扱ったからであろう。その意味でこの誄は特殊なものと言える。[15] 彼の誄を形式面から見れば、「光祿大夫荀侯誄」と「文帝誄」が四言體を基調としながら六字句を交えるほかはすべて四言體であり、三篇の哀辭がほぼ六字句を基調とするのとは對照的である。誄と哀辭は近接したジャンルではあるが、曹植の制作意識において、その區分は明確であったと考えられる。

はじめに見たように、『文心雕龍』と『文章流別論』には、哀辭の作者としての曹植は登場しない。ただし、『文心雕龍』誄碑篇では彼の誄について、

陳思叨名而體實繁緩、文皇誄末、百言自陳、其乖甚矣。

陳思は名を叨にすれども體は實に繁緩なり、文皇の誄の末は、百言して自らを陳べ、其の乖うこと甚だし。

と述べているように、繁雜さと多言ぶりを否定的にとらえている。これがとくに「仲雍哀辭」の評價にも響いている可能性がある。以後も彼の哀辭に注意する者は少なく、管見の範圍においては、劉克莊（一一八七～一二六九）の『後村詩話』續集卷二に「仲雍哀辭」の序の一部を引いて、「文字麗密有如此者。」と評し、李兆洛（一七六九～一八四一）が『駢體文鈔』卷二十六に、同じく「仲雍哀辭」を收めて、「有意表奇。」と評語を付しているにすぎない。しかし現存する作品から見る限り、彼が「許阿瞿墓誌」以降初めて哀辭を殘しているのであり、誄とは意識的に區分している點とあわせて留意しておく必要がある。實質的に哀辭は、曹植によって確固としたジャンルとして定着したとみなしてよいであろう。その後この文體に意欲を示した者に、西晉の潘岳（二四七～三〇〇）がいる。

四

『文心雕龍』哀弔篇は、次のように潘岳の哀辭をあらゆる點で高く評價している。

及潘岳繼作、實鍾其美。觀其慮贍辭變、情洞悲苦、敍事如傳。結

言摹詩、促節四言、鮮有緩句、故能義直而文婉、體舊而趣新、金鹿澤蘭、莫之或繼也。

潘岳の繼いで作るに及び、實に其の美を鍾む。觀るに其の慮は贍かにして辭は變じ、情は悲苦を洞くして、事を敍するは傳の如し。言を結ぶは詩を摹し、節を四言に促して、緩句有ること鮮なし、故に能く義は直にして文は婉に、體は舊きも趣は新たなり、金鹿・澤蘭は、之を繼ぐもの或る莫し。

『藝文類聚』巻三十四には、劉勰が絶讚する「金鹿哀辭」と「爲任子咸妻作孤女澤蘭哀辭」のほかにも、「陽城劉氏妹哀辭」と「京陵女公子王氏哀辭」が收められている。このほか、謝莊「宋孝武宣貴妃誄」(『文選』巻五七)の李善注に、「妹哀辭」の「庭祖兩柩、路引雙輻、爾身爾子、永與世辭」という斷片が、また劉峻「廣絶交論」(『文選』巻五五)の李善注には、「潘岳哀辭曰」とあって引かれる『全晉文』未收錄の「望歸驚見、鳧藻踊躍」という斷片も存在する。さらに哀辭とは題されなくとも、「傷弱子辭」もその對象と內容からして哀辭とみなすことができる。

まず「金鹿哀辭」を見てみよう。

嗟我金鹿、天資特挺。鬢髮凝膚、蛾眉蠐領。柔情和泰、朗心聰警。嗚呼上天、胡忍我門。良嬪短世、令子夭昏。既披我幹、又剪我根。槐如瘣木、枯荄獨存。捐子中野、邊我歸路。將反如疑、迴首長顧。嗟我金鹿、天資特挺。鬢髮凝膚、蛾眉蠐領。柔情和泰、朗心聰警。嗚呼上天、胡忍我門。良嬪短世、令子夭昏。既披我幹、又剪我根。槐如瘣木、枯荄獨存。捐子中野、邊我歸路。將反如疑、迴首長顧。

「良嬪」は潘岳の妻楊氏を指す。楊氏が「短世」したのは元康八年(二九八)、彼が五十二歲のときのことと推定されている。[17]「良嬪短世、令子夭昏」の句からして、金鹿も母楊氏に續いてまもなく亡くなったのであろう。哀辭の前半は金鹿の容姿と性質のぬきんでたすばらしさを追想し、後半は妻の死についで我が身を襲った悲哀を述べる。「枯荄」の語は、妻の死後一年あまりして書かれた「悼亡詩三首」〈其三〉(『文選』巻二三)にも、「落葉委埏側、枯荄帶墳隅」と見える。枯れた根ばかりが殘っているという表現に、後嗣のない彼の悄然とした姿を重ねることも可能である。なぜなら妻の死より六年前、元康二年には嫡子を失っているからである。このとき潘岳は、太傅楊駿が誅されたのに連座して除名されていたが長安令として復歸し、洛陽から赴任する途中であった。「傷弱子序」(『文選』巻一〇「西征賦」李善注引)には、

三月壬寅、弱子生。五月之長安、壬寅、次于新安之千秋亭。甲辰而弱子夭、乙巳瘞于亭東。

三月壬寅、弱子生まる。五月、長安に之かんとして、壬寅、新安の千秋亭に次る。甲辰にして弱子夭し、乙巳、亭の東に瘞む。

と、新安の驛亭で、生まれて七旬に滿たない子を失ったことを述べている。また本文(『藝文類聚』巻三四)では、

奈何兮弱子、邈弃爾兮丘林。還眺兮墳瘞、草莽莽兮木森森。伊遂古之遐胄、逮祖考之永延、咨吾家之不嗣、羌一適之未甄。仰崇堂之遺構、若無津而涉川。葉落永離、覆水不收。赤子何辜、罪我之由。

弱子を奈何せん、邈かに爾を丘林に弃つ。還りて墳瘞を眺むれば、草は莽莽として木は森森たり。伊れ遂古の遐胄にして、祖考らして長く顧みる。

の永延に逮びしに、咨吾が家の嗣がれざる、羌一適の未だ甄らざる。崇堂の遺構を仰げば、津無くして川を渉らんとするが若し。葉は落ちて永く離れ、覆水は收められず。赤子に何の辜かあらん、罪は我の由なり。

と、潘家の後嗣を失った悲しみを繰り返している。[18] 曹植の「金瓠哀辭」にも「信吾罪之所招」と、幼兒の死の責任を自らに歸そうとする姿勢があったが、潘岳は旅の途中で男兒を死なせただけに、「罪我之由」という表白には痛切なものがある。この男兒の死は非常な衝撃だったのだろう。「西征賦」においても、

夭赤子於新安、坎路側而瘞之。亭有千秋之號、子無七旬之期。雖勉勵於延吳、實潛慟乎余慈。
赤子を新安に夭し、路側に坎して之を瘞む。亭に千秋の號有るも、子に七旬の期無し。延・吳より勉勵すと雖も、實に余が慈を潛慟せしむ。

と、新安での痛恨事を重ねて追懷している。さらに、のちの追想の詩と思われる「思子詩」（『藝文類聚』巻三四）でも、

造化甄品物　造化は品物を甄し
天命代虛盈　天命は虛盈を代う
奈何念稚子　奈何せん稚子を念うを
懷奇隕幼齡　奇を懷くも幼齡に隕す
追想存髣髴　追想すれば存すること髣髴たり
感道傷中情　道に感じて中情傷む
一往何時還　一たび往きて何れの時にか還らん
千載不復生　千載　復た生きず

と、我が子の才能が開花する時間の與えられなかったことを惜しんでいる。多様な文體を用いた執拗な描寫からは、悲哀に沒入している父親の姿が浮かんでくる。金鹿を失ったときにも當然、旅の途次での嫡子の死が想起されたに違いない。

このような悲哀への沈潛は、自身の子が死亡した場合にのみ限定されるわけではない。それは「爲任子咸妻作孤女澤蘭哀辭」を見れば明らかとなる。この作品は太康元年（二八〇）ごろのものと考えられる。「任子咸妻」とは、潘岳の妻の妹であり、彼の友人任護に嫁した楊氏を指す。この年、彼女は夫とも死別した。その間のことは、「寡婦賦」（『文選』巻一六）の序に、

其妻又吾姨也。少喪父母、適人而所天又殞。孤女藐焉始孩。
其の妻は又吾が姨なり。少くして父母を喪い、人に適ぎて所天も又殞す。孤女は藐焉として始めて孩す。

とあり、「任澤蘭哀辭」の序（「寡婦賦」李善注引）にも、

澤蘭者、任子咸之女也。涉三齡、未沒喪而殞。余聞而悲之、遂爲其母辭。
澤蘭は、任子咸の女なり。三齡に涉り、未だ喪を沒えずして殞す。余れ聞きて之を悲しみ、遂に其の母の辭を爲る。

とあることによって知られる。遺兒澤蘭が父親のあとを追うように死んだのは、三歲のときであった。次に本文を見よう。

茫茫造化、爰啓英淑。猗猗澤蘭、應靈誕育。鬒髮蛾眉、巧笑美目。顏耀榮苕、華茂時菊。如金之精、如蘭之馥。淑質彌暢、聰惠日新。朝夕顧復、夙夜盡勤。彼蒼者天、哀此矜人。胡寧不惠、忍予眇身。俾爾嬰孺、微命弗振。俯覽衾襚、仰訴穹旻。弱子在懷、既生不遂。存靡託躬、沒無遺類。耳存遺響、目想餘顏。寢席伏枕、摧心剖肝。相彼鳥矣、和鳴嚶嚶。矧伊蘭子、音影冥冥。彷徨丘壟、徙倚墳塋。

茫茫たる造化、爰に英淑を啓く。猗猗たる澤蘭、靈に應じて誕育せらる。鬢髮と蛾眉と、巧笑と美目と。顏は榮苕のごと耀き、華は時菊のごと茂し。金の精の如く、蘭の馥の如し。淑質は彌いよ暢び、聰惠は日に新たなり。朝夕顧復し、夙夜盡く勤む。彼の蒼き者は天、此の矜人を哀れむ、という。胡寧ぞ惠れまずして、予が眇身に忍き。爾嬰孺をして、微命振わざら俾む。俯しては衾襚を覽、仰いでは穹旻に訴う。弱子は懷に在りて、既生は遂げず。存しては朝を託する靡く、沒しては遺類無し。耳には遺響を存し、目には餘顏を想う。蓆に寢ね枕に伏せば、心を摧き肝を剖く。彼の鳥を相れば、和鳴嚶嚶たり。矧んや伊の蘭子の、音影冥冥たるをや。丘壟に彷徨し、墳塋に徙倚す。

前半はありし日の澤蘭のおもかげを述べ、後半は彼女なきあとの寂莫と心痛を述べる。これは、「金鹿哀辭」の構成と基本的に變らない。ただ、この作品は『文心雕龍』の指摘のように『詩經』の句を意識することが多く、しかもそれは「結言」にとどまらない。簡單な對照を試みれば、以下のとおりである。

既生不遂→既生既育（邶風、谷風）
鬢髮蛾眉、巧笑美目→螓首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮（衞風、碩人）
夙夜盡勤→夙夜無已（魏風、陟岵）
彼蒼者天、哀此矜人→彼蒼者天、殲我良人（秦風、黃鳥）爰及矜人、哀此鰥寡（小雅、鴻鴈）
胡寧不惠、忍予眇身→胡寧忍予（小雅、四月）皇天不惠（小雅、節南山）
相彼鳥矣、和鳥嚶嚶→鳥鳴嚶嚶、……相彼鳥矣（小雅、伐木）

たとえ妻の姪だとはいえ、『詩經』を援用しながらの悲哀の描寫のたたみかけは突出している。これを同時代の陸機（二六一～三〇三）の「吳大司馬陸公少女哀辭」（『藝文類聚』卷三四）と比較すれば、いっそう明らかとなろう。

冉冉晞陽、不遂其茂。曄曄芳華、凋芳落秀。遵堂涉室、髣髴興想。人皆有聲、爾獨無響。

冉冉たる晞陽は、其の茂を遂げず。曄曄たる芳華は、芳を凋ませ秀を落す。堂に遵い室に涉れば、髣髴として想い興る。人は皆な聲有るも、爾は獨り響無し。

確かに潘岳の哀辭は曹植の哀辭とは異なってすべて四言體であり、その點では「體は舊」いのであるが、巧みに情感を盛りこむことに成功している。劉勰の「及潘岳繼作、實鍾其美。」という指摘は、まさに潘岳の哀辭の位置を言い當てていると言うべきであろう。

さて次に潘岳と同時代の孫楚（？～二九三）と梁の蕭綱（五〇三～五五一）の哀辭について概述しておこう。孫楚の作品中、哀辭と題するのは「胡母夫人哀辭」（『藝文類聚』卷三四）のみであるが、「和氏外孫道生哀文」（同）と「和氏外孫小同哀文」（同）も四言體の韻文であって、內容から推して哀辭とみなすことが可能である。「胡母夫人哀辭」は、文中の「邂逅之遇、遘茲良會」（邂逅の遇ありて、茲の良會に遘う）、「冀享永年、偕老一世、景命伊何、忽然長逝」（永年を享け、偕に一世に老いんことを冀うに、景命伊れ何ぞ、忽然として長逝す）などの句から見て、嫁いでまもなく「長逝」したと思われる夫人が對象であり、曹植と潘岳の哀辭がすべて「童殤」を對象としたのとはやや異質である。それでは「和氏外孫小同哀文」を見よう。

曄曄葩華、朝生夕落。爾命方之、猶爲淺薄。暫有冥質、尋友冥

漠。譬彼蜉蝣、不識晦朔。死尚未知、生亦焉知。爾雖旬月、我未之視。萬物混焉、天地一指。杪末嬰孩、安足稱誄。大人達觀、同之一揆。

曄曄たる蕣華は、朝に生じ夕べに落つ。爾が命は之に方ぶるも、猶お淺薄爲るがごとし。暫く冥質有るも、尋いで冥漠を友とす。譬うれば彼の蜉蝣の、晦朔を識らざるがごとし。死すら尚お未だ知らず、生も亦た焉ぞ知らん。爾旬月と雖も、我未だ之を視ず。萬物は混焉として、天地は一指なり。杪末の嬰孩なれば、安くんぞ誄を稱するに足らんや。大人は達觀し、之を一揆に同じくす。

「杪末嬰孩、安足稱誄」の句に注目したい。この「哀文」は孫楚の意識において、誄とは明確に一線が畫されている。「嬰孩」は誄を獻ずる對象とはならないのであり、「道生」も「二十三旬」を經た「孟冬」に死んでいる。孫楚の作品は悲哀を抑制して、これを超克しようとする姿勢が強い點で興味深いが、制作者の側から誄と「夭昏に施す」文體との區別を語っている貴重な資料と言えよう。

西晉以降の六朝期の哀辭は、梁の簡文帝蕭綱の「大同哀辭」（『藝文類聚』卷三四、『文苑英華』卷九九九）が存在するのみである。[19]「大同」は序文によれば字は仁洽、簡文帝の第十九子であり、「生於仲秋、殞於冬末」とあるから、四箇月ほどで死んだことになる。この作品は四十八句からなる長篇なので、終末部分を揭げよう。

……於是風景暮鍾、氣嚴晚候。葉蔌蔌而走堦、水戔戔而鳴漏。月半鏡而開河、雲羅柱而下岫。燈發焰而吐花、火含光而成就。金鹿之恨涕沾衣、金瓠之哀還掩扉。猶茲紫山明玉碎、譬彼西都芳草腓。終無逐浪鳧舡反、何時復聞龍種歸。

……是に於て風景は暮れに鍾まり、氣は晩候に嚴し。葉は蔌蔌として堦を走り、水は戔戔として漏を鳴らす。月は半鏡のごとくして河を開き、雲は羅柱のごとくして岫を下る。燈は焰を發して花を吐き、火は光を含んで成就す。金鹿の恨みに涕は衣を沾し、金瓠の哀しみに還って扉を掩す。猶お茲の紫山の明玉の碎くるがごとく、譬えば彼の西都の芳草の腓むがごとし。終に浪を逐いし鳧舡の反る無くんば、何れの時にか復た龍種の歸るを聞かん。

一篇は四、六、七字句で構成され、對句技法にことさらに意を凝らしている。省略したが、「籍綺茵於弱肌、隱孩笑於羅帷」（綺茵を弱肌に籍き、孩笑を羅帷に隱す）の句は、曹植の「金瓠哀辭」や「仲雍哀辭」から發想を得たものであろうし、「藥尚殘而染地、衣猶襞而在牀」（藥は尚お殘って地を染め、衣は猶お襞まれて牀に在り）の句は、潘岳の「悼亡詩」〈其一〉の「遺挂猶在壁」（遺挂は猶お壁に在り）を緊密な對句に再構成したものであろう。そしてなによりも「金鹿之恨涕沾衣、金瓠之哀還掩扉」の句が、潘岳と曹植の哀辭を、蕭綱が强く意識したことをはっきりと示している。またこのことは當時においても、兩者の哀辭が傑出していると考えられていたことの傍證ともなるであろう。「大同哀辭」以後、南北朝期の哀辭は全く見られなくなる。

五

唐代以降の哀辭について、明の吳訥（一三七二～一四五七）の『文章辯體』は、

厥後韓退之之於歐陽詹、柳子厚之於呂溫、則或曰誄辭、或曰哀辭、而名不同。迨宋南豐、東坡諸老所作、則總謂之哀辭焉。

厥の後、韓退之の歐陽詹に於ける、柳子厚の呂溫に於けるは、則ち或いは誄辭と曰い、或いは哀辭と曰いて、名同じからず。宋の

南豐、東坡諸老の作る所に迫びては、則ち總て之を哀辭と謂う。と述べている。ここでは誄と哀辭の定義が明確ではないが、誄を哀辭と稱する例が多くなるという指摘は正しい。韓愈（七六八～八二四）が「歐陽生哀辭」（『昌黎先生集』卷二二）を獻じた歐陽詹は、卒年四十歲餘であり、「獨狐申叔哀辭」（同）は、二十六歲で死んだ獨狐申叔に對して書かれている。柳宗元（七七三～八一九）の「唐故衡州刺史東平呂君（呂溫）誄」（『柳河東集』卷九）は、哀辭とは題されておらず、また彼の「楊氏子承之哀辭」（同、卷四〇）は序の冒頭に、「楊氏子承之、既冠、有成人之道。其明年四月、不幸而夭。」とあるように、夭折したとはいえ成人が對象である。ただし彼の誄は四言體であり、哀辭は兮字を含む七字句を基調としていて、體式の面での區別はある。

宋代に入ると曾鞏（號は南豐。一〇一九～一〇八三）の『元豐類藁』卷四十一には、「蘇明允（蘇洵）哀詞」「吳太初（吳象先）哀詞」「王君俞（王寅亮）哀詞」の三篇が收められるが、卒年は順に五十八歲、三十一歲、三十六歲であって、いずれも彼らの事蹟が中心となって記述される。さらに蘇軾（一〇三六～一一〇一）の『東坡集』卷十九には、「李仲蒙（李育）哀詞」「錢君倚（錢公輔）哀詞」「蘇世美哀詞」の三篇があり、これらもすべて成人に獻じられている。南宋の陸游（一一二五～一二一〇）の「尤延之（尤袤）尚書哀辭」「沈子壽（沈瀛）母趙夫人哀詞」（ともに『渭南文集』卷四一）についても、事情は同樣である。さらに降って清代に入ると、方苞（一六六八～一七四九）が十六篇もの哀辭を殘している。このうち「婢音哀辭」（『方苞集』卷一六）だけが十七歲で死んだ家婢を悼むものであるが、他はすべて成人を對象とする。唐代以後の哀辭は、柳宗元のように誄との體式上の區別をすることはあっても、ほとんど「童殤・夭折に施」されることはなくなってしまったのである。[21]

以上見てきたように、哀辭は後漢の建寧年間までには成立していたことが認められ、曹植が出た建安年間に至って作者の個性を反映しうる文體として確立し、潘岳によって洗練の度を加えられ、梁代までは餘韻を保ったものの唐代以降はほとんど衰微してしまう。このような推移をたどったのは、唐代には顧況（七二七～八一五）に「悼稚」（『全唐詩』卷二六七）と題する「稚子」の死を悼んだ七絕、孟郊（七五一～八一四）には嬰兒の死を追懷する「悼幼子」「杏殤」八首（『全唐詩』卷三八一）、さらに白居易（七七〇～八四六）には三歲の阿崔の死を悼む七律「哭崔兒」（『白香山詩後集』卷一〇）があるように、哀辭よりも詩において幼兒の死を哀悼する傾向が生まれたと思われること、また成人の死者を對象とする哀祭類の他の諸文體とは異なり、人生の蓄積のほとんどない幼少の者を對象にするという、哀辭が本來的に有していた限界性のもたらした結果であったと言えるであろう。

注(1) 一部を扱ったものに、兒島獻吉郎『支那文學考』韻文考（目黑書店、一九二二）、西岡弘『中國古代の葬禮と文學』（三光社出版、一九七〇）及び高橋和巳「潘岳論」（『中國文學報』第七冊、一九五七）がある。

(2) 『文心雕龍』からの引用は主として范文蘭『文心雕龍註』に依り、王利器『文心雕龍校証』、楊明照『文心雕龍校注拾遺』などを參照した。

(3) 『北堂書鈔』卷一九は、「當中夏兮下霜」に作る。

(4) 『太平御覽』卷五九六に引く『文心雕龍』は「汝陽主」に作る。「汝陽主」ならば、『後漢書』卷一〇下皇后紀和帝四女のうちに「皇女廣、永和六年（一四一）封汝陽長公主。」とある劉廣のことか。

(5) 金振邦編著『文章體裁辭典』（東北師範大學出版社、一九八六）の「哀

辭」の項には、清の王兆芳の『文體通釋』から、「哀辭者、愛閔悲傷以屬辭也。主于列事垂情、悲慟惋嘆。源出漢明帝命班固作馬仲都哀辭、流有魏曹植作仲雍及金瓠行女諸哀辭。」という記述を引用する。『文體通釋』は未見だが、この源流説も『太平御覽』巻五九六の記事に基くのであろう。

(6) ただし楊脩には、「傷夭賦」(潘岳「悼亡詩」〈其三〉李善注引) の断片「悲體貌之潛翳兮、目常存乎遺形」が残されており、夭折者を傷む作品があったことは確かである。

(7) 『江上波夫教授古稀記念論文集』民族・文化篇（山川出版社、一九七七）一八五頁。

(8) 本文の引用は、校定の綿密な高文『漢碑集釋』（河南大學出版社、一九八五）に依った。

(9) 河南省文物研究所「華夏考古」一九八八年第三期。

(10) 原文と書き下し文は以下の通り。「猗歟使君、君侯將軍、膺秉懿德、允武允文、體足剛直、守以溫仁。令舒及盧、遺愛于民、牧幽聳徐、甘棠是均。憬憬夷貊、賴侯以清、蠢蠢妖寇、匪侯不寧。唯帝念績、爵命以章、既牧且侯、啓土溧陽。遂升上將、受號安東、將平世難、社稷是崇。降年不永、奄忽殂薨、喪覆失恃、民知困窮。曾不旬日、五郡潰崩、哀我人斯、將誰仰憑、追思靡及、仰叫皇穹。嗚呼哀哉。」(猗歟使君、君侯・將軍、懿德を膺秉し、允に武允に文、體は剛直足り、守るに溫仁を以てす。舒及び盧に令として、民に遺愛あり、幽聳び徐に牧として、甘棠と是れ均し。憬憬たる夷貊は、侯に賴りて以て清まり、蠢蠢たる妖寇は、侯に匪ずんば寧らかならず。唯だ帝は績を念い、爵命以て章らかにし、既に牧にして且つ侯、土を溧陽に啓く。遂に上將に升り、號を安東に受け、將に世難を平らげんとして、社稷も是れ崇ぶ。降年永からず、奄忽として殂薨し、喪覆して恃みを失い、民は困窮を知る。曾ち旬日ならずして、五郡潰崩す、哀しいかな我が人、將た誰にか仰憑せん、追思するも及ぶ靡く、仰いで皇穹に叫ぶ。嗚呼哀しい哉。)

(11) 裴松之は「爲孫會稽責哀術僭號書」について、「典略云張昭之辭。臣松之以爲張昭雖名重、然不如紘之文也、此書必紘所作。」(典略に云う張昭の辭と。臣松之以爲らく張昭は名は重しと雖も、然るに（張）紘の文には如かざるなり、此の書は必ず紘の作る所と。) と述べる（『吳志』巻一孫策傳裴注引『吳錄』の案語）。早くから張昭の文才に疑問が持たれていた一例である。

(12) 曹植の作品の引用は主として『藝文類聚』に依るが、丁晏『曹集銓評』と趙幼文『曹植集校注』を參照した。

(13) 曹植には「慰子賦」（『藝文類聚』巻三四）がある。對象は不明だが、「彼凡人之相親、小離別而懷戀。況中殤之愛子、乃千秋而不見。……惟逝者之日遠、愴傷心而絕腸。」(彼の凡人の相い親しむ、小離別にして懷戀す。況んや中殤の愛子の、乃ち千秋見えざるをや。……逝く者の日びに遠きを惟い、愴み傷心して腸を斷つ。) という表現からして、愛兒の死の悲哀を、哀辭だけで處理することはできなかったのであろう。

(14) 『漢魏六朝一百三家集』は「蒼舒誄」を曹植の作とするが、他書は一致して曹丕の作とする。

(15) 福井佳夫「六朝文體論—誄について—」(「中國中世文學研究」一四、一九七九) は、「平原懿公主誄」には觸れないが、「曹植は儀禮的な誄と眞情を吐露した誄との書き分けを意識して行った、最初の文人であったろうと想像する。」と述べている。

(16) 『藝文類聚』に依ったが、明白な誤りは『漢魏六朝一百三家集』などに照らして改めた。

(17) 傅璇琮「潘岳系年考證」(「文史」一四、一九八二) など。

(18) 興膳宏『潘岳　陸機』(筑摩書房、一九七三) 一一四頁は、「傷弱子辭」には「惻惻として父たるものの慟哭がこめられている。」という。

(19) 『太平御覽』巻三五九には孫惠（二五八～三〇四）の「三馬哀辭序」

なる文章を收める。「余於物特所心、而所服三馬、一時離羈、感田子之愛、遂作哀文云爾。」（余れ物に於て特に心とする所あり、而るに服する所の三馬、一時に羈を離る、田子の愛に感じ、遂に哀文を作りて爾云う。）がその全文である。田子方の故事に言及するところからして、「三馬」は車の引き馬であろう。人間を對象とするものではない。

(20) 『藝文類聚』は「第十子」とする。

(21) 吳訥は擧げないが、唐代には王維（六九九～七五九）の「宋進馬哀辭」（『王右丞集』卷二七）がある。宋璟の子である宋進馬の年齢は不詳だが、この哀辭には「不識兮往來、眼中不見兮吾兒」（往來を識らず、眼中に吾が兒を見ず）、「闢朱戶兮望華軒、意斯子兮候門」（朱戶を闢いて華軒を望めば、斯の子の門に候つかと意う）の句があるので、年少者を對象としたものと考えられる。

〔付記〕本稿は一九八六年度の日本中國學會大會（於筑波大學）において發表した原稿を、補訂して成ったものである。當日、司會者として助言してくださった伊藤正文先生、原稿を御批正くださった加賀榮治先生、故鈴木修次先生、岡村繁先生をはじめ、御指導いただいた諸先生に深く感謝する。